

赤潮：諫早湾で今年初めて

大量排水の影響か

【毎日・5月31日】褐色の潮が漂う諫早湾。後方は諫早干拓地調整池北部排水門

長崎県の諫早湾で、今年初めての赤潮が発生している。国営諫早湾干拓事業（諫干）の北部排水門付近の湾内は30日、広範囲にわたって海面が赤黒く濁り、拡散し続けている。

県総合水産試験場によると、26日夕に南部排水門近くの同県雲仙市瑞穂町から同県島原市沖までの約10キロにわたり、赤潮が広がっているのが確認された。

27日には北部側の諫早市高来町沖でも確認され、次第に範囲を広げている。海水分析の結果、有害プランクトンの「ヘテロシグマアカシオ」による赤潮という。

大雨の影響で今月23、24日、北部から約1600万トン、南部から約1140万トンの淡水が排出されており、漁業者から「赤潮は淡水が原因」との声が出ている。同試験場は「因果関係は不明」としている。

諫干を巡っては、政府・与党の検討委員会が「長期開門調査が適当」とする報告書を赤松広隆農相に提出。農相は近く、開門方針を正式表

明するとみられるが、長崎県は開門に反対しており、調整は難航が予想される。



漁場か農地か 大雨時 アサリ被害 後背地冠水

【西日・5月25日】23、24の両

日行われた諫早湾干拓事業調整池からの大量排水は、同事業の防災機能をめぐる課題をあらためて浮き彫りにした。大雨時に北部排水門から排水しなければ周辺農地が冠水し、排水すれば外側の漁場が荒れる。間もなく梅雨入り。排水門を管理する県は、漁場と農地のどちらを優先するか二律背反の選択を迫られる。

「一度アサリが死ぬと回復するまでに3年はかかる」 北部排水

門の外でアサリ養殖をしている小長井町漁協（諫早市）の新宮隆喜組合長は危機感を募らせる。大量の雨水を放出する際に潮の干満差が小さいと、淡水が長期間漁場に滞留しアサリを死滅させるからだ。

北部排水門からは昨年度、63回の排水があり1回平均約220万トンを放出した。7月の大雨では約850万トンを排水したが、同漁協によると8月上旬に影響が表れ被害はアサリ約565トン約1億5800万円に達したという。今回の排水は2回で計約1670万トンに上った。新宮組合長は「大潮の時なら排水してもいいが、それ以外は困る」と語る。

県諫早湾干拓室の加藤兼仁室長は「後背地に冠水の恐れがある場合、開門するしかない」と説明する。農地の浸水被害は干拓地周辺地域の長年の課題で、中でも標高マイナスイオ・8メートルの農地もある東南部の森山干拓地が最も深刻な状況だ。多いところで190ミリ以上に達した22、23両日の雨では収穫前の麦畑などが浸水した。

排水問題の解決策に挙げられるのが、後背地の排水機能強化だ。県によると森山干拓地に設置された排水ポンプは老朽化で2002年度以降、動いていない。農家負担の問題などがこじれ、長年放置されてきたという。

諫早市が農家負担をゼロにした整備計画をまとめ、県は昨年度、約5

9億円の排水対策事業に取り組みことを決めた。国に事業費の半額負担を申請し、6月にも認められる可能性があるという。

だが、対応の遅さに森山干拓地の農業者男性は憤る。潮受け堤防が完成すれば防災機能は担保されるということだったのに実態は違った。この程度の雨にいつまで心配する必要があるのか

ユスリカ裁判官に見せたくない県職員「偶然」清掃

【毎日・6月1日】島しま…清掃

国営諫早湾干拓事業（諫干）を巡り、諫早湾内の漁業者らが開門などを国に求めた訴訟。長崎地裁の裁判官が5月、現地視察した際、堤防道路では道路に架かる歩道橋などを清掃する県職員らの姿があった。

堤防道路はこの時期例年通り、ハエの仲間・ユスリカの大発生が始まり、歩道橋の欄干などにクモの巣も含めて大量に付着中。県によると、清掃は2カ月に1度程度。「この日になったのは偶然」らしいが、前回は4月上旬だった。裁判官の到着前には、歩道橋はきれいになっていた。

視察後、原告弁護士側は「ありのままの姿をみせるのが現地視察のはずだ」と批判した。県のいう「偶然」は、厳肅な雰囲気が進んだ視察だっただけに、何とも後味の悪い印象を私は覚えた。